

と、岡田はプラハ、ウイーン、ブダペスト、ブカレスト、コンスタンチノーブル、ソフィア、ベルグラード、ヴェネチア、ローマ、フロレンス、パドヴァの順に訪れた。「バルカンの各國には夫々立派な美術館があつて、繪畫等も澤山陳列せられてゐたけれども之は餘り見ないことにして、今度の旅行では、主として考古學的のものや風俗に關係のあるものを注意して見た。」と記している。イタリアでは大橋が「フロレンスではどんな小さなお寺でもフレスコのある處は見て歩かれた。そして繪具屋でフレスコ繪具の色々の種類を集められた。私は先生に神宮繪畫館の壁畫はフレスコでお描きになるのですかと聞いたらいや僕がかうして調べておいてやれば日本で誰れか始めた人があつた時直ぐ役に立つからと云ふお答へであつた。」と記しているように、意欲的に壁畫を見て廻つた様子である。このように一カ月半ばかり旅行して一旦パリに戻り、平福百穂とともにシベリヤ經由で帰国の途に着き、十一月二十五日に下関に到着した。

③ 今和次郎の渡歐

「工藝製作法」授業担当講師（早稲田大学理工科助教授）今和次郎は昭和五年三月一日、欧州各國の美術を研究するために出発、四月七日パリに到着。翌六年一月帰国した。

『東京美術学校校友会月報』第二十九卷第二号には今の手紙が二通掲載されている。第一通目についてはスフィンクスを背景に三木辰夫、松岡映丘、長谷川路可、平福百穂、今和次郎が並んで写っている写真とともに次のように紹介されている。

○在巴里今講師より鈴川〔信一〕教授宛

スフィンクスの前に立つてゐる同窓五人の寫眞をお送りいたします。寫眞の日付は昭和五年三月三十一日です。エジプトはたゞ赤毛布式の見物でした。

偶然にも同じ船に五人も學校出が乗り合せた事は珍らしい事なのです。茶に談話に賑ひました。

船は二月の二十七日に神戸を出た榛名丸でしたが、松岡平福兩先生と長谷川氏は神戸から、三木氏は横濱から、そして小生は門司から、夫々乗船しました。

船中一と月の間に色々通信申上げたい事は山々ありましたが、何しろ平福松岡兩先生は今度イタリアへ國賓として行かれるのだといふので、いつも船中での賑はふ中心にされてゐました。途中の寄港地で色々のもが興味がありました。マレー土人や印度人の風俗、熱帯地の風景は感興を與へて呉れました。

少しばかり餘興を書き添へれば、紅海の單調な海を走つてゐる夜、船で假裝會が催されましたが、そのときに本物の印度僧、アラビヤの王様及古代エジプトの女が現はれたかのうまい装ひをしたのが、イタリアー展に行かれる三人の先生でした。船中一同、先生方の風俗研究の行きとどひてゐられるのにあつと云つた次第でした。

地中海を航行中、クリート島の八千尺の山が雪をいたゞいてゐるのが珍らしく見られました。

平福松岡先生と長谷川氏はナポリ上陸、三木氏はロンドン行き、小生はマルセイユに上陸します。〔下略〕

同誌第二十九卷第五号所載の山脇巖の手紙には十月に今和次郎がベルリンを訪れたことが、また第六号所載の和田季雄の手紙には十月八日、ベニスでゴンドラに乗って行く途中、向うから来たゴンドラに今が乗っていたことが記されている。

④ ローマの日本美術展覧会と松岡映丘の渡欧

昭和五年四月二十六日から約一カ月間、イタリア政府主催の日本美術展覧会が開催された。この展覧会はイタリア政府の熱心な要請によって開催されたもので、名誉総裁にムッソリーニが就任し、日本側は大倉喜七郎男爵が財政的援助を行ない、現代日本画百七十八点が展示され、横山大観、平福百穂、松岡映丘、速水御舟、長谷川路可、大智勝観が美術使節としてローマに赴いた。

大観（夫人同伴）、御舟、勝観ら院展の画家は一月三十日に約五百名の盛大な見送りを受けて東京駅を出発した。寺内、中村ら表具師も同行したが、これは会場のヴィーヤ・ナチョナーレ展覧会場の壁面二百五十坪を貼り、床の間十三を作り、純日本風の展示空間を作るためであった。百穂、映丘、路可ら帝展の画家は約一カ月遅れて二月二十五日、やはり千人を過す盛大な見送りを受けて出発した。この展覧会には大観の「夜桜」「瀟湘八景」「富士」、映丘の「屋島の義経」、百穂の「荒磯」、竹内栖鳳の「睡郷」その他力作が出品され、会場は日本風にしつらえられ、特に大観は日本趣味を押し出すという意気込みで夫人とともに和服で通すなどしたので、大いに関心を集めた。大観夫妻と勝観は六月二十八日に、映丘と路可は九月六日に、御舟は十月二十三日に、百穂は欧州視察を了えた岡田

三郎助とともに十一月二十五日に帰国した。映丘帰国の模様を九月七日付『時事新報』は次のように伝えている。

歐米美術行脚の映丘畫伯歸朝す

紐育美術館で見つけた見事な平治合戦繪卷

六日午後四時横濱入港の郵船大洋丸で去る四月伊太利羅馬に開催の日本美術展に出席し、其後歐米各美術館に陳列の東洋美術の行脚視察を續けて居た帝國美術院會員東京美術學校教授松岡映丘畫伯は、安内役の長谷川路可畫伯と共に歸朝した、横濱埠頭には川合玉堂、結城素明、鏑木清方、矢澤弦月、吉田秋光諸氏を始め、美術家が出迎へて賑つた、松岡畫伯は伊太利コマンダー トーレー コロナール イタリア（伊太利王冠章）長谷川畫伯は伊太利のジョットの壁畫、マドリッドのゴヤの壁畫の摸寫を土産に持ち歸つた、映丘畫伯は語る

『私は日本美術展の開會式に參列後直に歐洲各地の美術行脚に出掛けた、支那の繪畫は到る所に立派なコレクションがあつたが日本の繪畫となると數は少く注目すべき物もほとんどなかつた豫期せずして非常に嘆賞に堪えなかつたのは紐育美術館にあつた平治合戦繪卷の見事な出來榮のものであつた、之は住吉慶恩筆と傳へられて居るものである、歐米人の日本畫に對する興味は非常なものであつたが果して深く理解して居るか何うかとなると疑問と云つてよい、日本畫家の立場から向ふの名畫を澤山見て來た釋だが結局信念を深め得たのは、吾々としては寧ろ今後も東洋精神の傳統の深さを追究して行くことが第一であるといふことであつた』